童貞

豊島与志雄

青空文庫

ぼんやりしていた心地を、ふいに、見覚えのある町角から呼び醒されて、慌てて乗合自動車から飛び降りた。それから機械的に家の方へ急いだ。

胸の中が……身体中が、変にむず痒くって、息がつけなかった。頬辺から鼻のあたりに、こな白粉の香がこびりついていて、掌で……それからハンケチで、いくら拭いても取れなかった。拭けば拭くほど、ぷーんと匂ってきた。

嬉しいようで、なさけないようで、ほーっと息を吐くと、その息の根が震えた。

晴れてるのか曇ってるのか、底知れぬ茫とした空だった。……が、宵闇に浮び出てる軒燈の灯が、きらきらと、珍らしくて美しかった。

よその家へでも迷い込むような気持で、静に自家の玄関へはいった。誰も出迎える者がない……よかった、と思うとたんに、女中が立ってくる気配がした。それが却ってきっかけとなって、つかつかと茶の間へはいっていった。

「まあー、朝から出たっきり、どこへ行っていました。」

「井上君のところで遅くなって……。」

「そう、御飯は。」

「済みました。」

「やはり井上さんのお宅で……。それならいいけれど、こんどからは、御飯はどうするかちゃんと云っておかなければ困りますよ。あなたのために随分待ちましたよ。」

それっきりだった。……母は何にも感づいてはいないんだな。

だが……天井からぶら下ってる電燈、茶箪笥や長火鉢、父の読み捨ての夕刊、それを丹念に読んでる母……昔からその通りで、そしてこれからも永遠に……。畜生、何もかも……。

「お母さん、」

「え。」

夕刊から振向いた母の眼が、嘗て見識らぬ愚鈍な者の眼付だった。

「僕は今日、素敵なものを見たんです。自動車と荷車と衝突して……。」

「そして。」

「正面からぶつかったんです。すると……荷車を引いた男の眼玉が、ぽんぽんと二つ共とび出しちゃって……。」

「え、何ですって。」

「夕刊に出てませんか。」

「夕刊にですか。」

その隙に、煙草を一本袂から探って、すぱすぱやってみたが、気のせいか、頬辺にやはり白粉の香がくっついていて、どうにも困った。

向うの室から、放笑しそうなのをじっとこらえた顔付で——眼付で、お千代が見ていた。そのぽっちりした赤い頬辺に、飛んでいってかじりついてやったら……母の眼の前で。

母の頸筋が、生え際が、薄ら寒そうに細そりとしていた。

何だかぎくりとした。その拍子に、トトンントン、トトンントン……指先で火鉢の縁をやけに叩いてやった。

なぜ皆黙ってるんだ。

「ダンスでも習いたいな……。」

トトンントン、トトンントン……。

「まあー、どうしたんですよ、口の中でぶつぶつ云って、そして……。」

トトントントン……。顔が一寸挙げられなかった。

「僕は……ダンスを習いたいんだけれど……。」

擦り寄ってきて、肩のあたりと腿のあたりとの厚ぼったい重みで、焦れったそうにトントンとやった、彼女の肉のはずみが、今ふいに蘇ってきて、とても抵抗出来なかった。指先から次には身体中で、トトントントン、トトントントン……。胸の底がほてってきて、息苦しかった。

「おかしな人ですね。どうかしたんですか。」

今迄見たこともないような、赤の他人の眼付で母が覗きこんでくる…とはっきり意識したが、それが見返せなかった。

「少し酒を飲ませられちゃって……。」

「お酒を。」

「そして急いで帰ってきたもんだから、汗をかいちゃって……。」

出まかせに云い出したのが実は本当で、身体中がねとねとして気味悪かった。

「それでは……あの、お湯にでもはいったら……。」

「お湯がわいてるんですか。……すぐにはいろう。」

「今加減を見せますよ。」

母が女中を呼ぶのを待たないで、もう帯を解きかけながら、湯殿の方へ馳け出していった。

首筋まで全身をぐったりと湯に任せ、後頭部を浴槽（ゆぶね）の縁にもたせかけて、もーっとした湯気の中から、ぼんやりした電燈の目玉を眺めていた。

何にも考えることが出来なかった。身体の節々に力がなかった。はずみをつけて動いていた気分が静まり淀んで、それから、疲れきったのろい渦を巻き初めた。それに引き込まれて気を失いそうだった。

きりきりと金物の軋るような音が……ごーっと暴風の吹き過ぎるような音が……どこか遠くでしていた。

「……お加減は……。」

はっと我に返って立上った。湯をじゃぶじゃぶやった。——誰が加減なんか悪いものか。

「あの……お加減は如何でございますか。」

戸の外からお千代の声がはっきりしてきた。湯の加減だったのか。……丁度ぬる加減でよかったが、然し、頭がふらふらしていた。

「丁度いいよ。」

元気よく答えてやったけれど、それだけで、身を動すのも大儀だった。

「床をとっといて下さい、すぐに寝るんだから。」

誰にともなく大きな声で云っておいて、湯殿から飛び出しかけた。が、……茶の間をぬけて寝室の方へ行くのには、母の前を通らなければならなかった。着物を抱えて真裸のままで母の前を……。

そんなこといつだって平気だったんだが……。

ふと、咽せ返るような追想に、足が竦んでしまった。

意気地なしめ、なあに……。

擽ったいような気持で、歯をぎりっと一つやって、猛然と突き進んでいった。

「もう寝むんですか。」

「ええ、頭痛がするんです。」

云いすてて、柱時計の方を見上げながらのっそりと、それでも九時半頃だと見て取っただけで、裸のまま母の前を通りすぎてやった。が次には小走りになった。

大急ぎに寝間着をひっかけて、頭まで布団の中にもぐり込んだ。とっぷりと水底に沈んだような、落付くところへ落付いた感じだった。そしてそれがなぜか、全身無気力に投げ出されたまま竦んでしまって、身動きが出来なかった。

一度……或は二度……母が様子を見に来たようだった。が黙っていた……というより、本当にはっきりとは意識しなかった。

二重眼瞼（ふたえまぶち）の眼がちらちらと動いていた。それが時々じっと真正面から覗きこんできた。

胸の奥がきりきり痛んでいた。

「あたし、あなたが好きになった。……ね……ねえ……。」

感情に抵抗してみるつもりだったのが、その「つもり」のために、却って自分の方から落ち込んでいった。

「あたし、何だか顔見られるのが嫌なのよ。」

畜生……と思って黙ってると、顔が真向になってきた。

「何を考えてるの。」

「困った。……君が好きになりそうだ。」

「そう、嘘にせよ嬉しいわ。」

二重眼瞼の眼が、瞬くたびに微笑んでいた。それが、なりそうどころではなく、本当に可愛くて好きになった。

どうしたらいいか分らなかった。

すぐそこに近々と微笑んでる眼が、いつまでも消えなかった。

それが、夢にも……現（うつつ）にも……朝まで続いた。他の一切はどうなったって構わない。その眼だけが……。

八重という名前の下に、「さん」をつけ、「ちゃん」をつけ、「子」をつけ、更にまた、「子」に「さん」や「ちゃん」をつけ……あらゆる名前で呼んでみた。そして最後に、八重子……。ちらちらとする眼が微笑んでいた。

母が二三度起しに来た。上の空で返事をして、やはり頭から布団にもぐりこんでいた。温気に息苦しくなると、頭を覗き出して眼をつぶった。

我慢出来なくなって起き上った。もう十一時を過ぎていた。

「加減でも悪いんですか。」

「何ともありません。」

冷たい水で顔を洗った。悲壮な気持だった。……母なんか、家なんか、何もかも、どうとでもなってしまえ。……そのくせ、誰の顔も真正面には見られなかった。むっつりと黙りこくっていてやった。

「御飯は午（ひる）に一緒に食べます。」

食う気もなかったが、そう云っておいて一寸外に出てみた。

晴れてはいるが淡い日の光だった。それでも強すぎた。桜の枝に蕾が赤くふくらんでいた。垣根の下に、青い草の葉が三つ四つ、冬を越したのか——そんな筈はないが、もう萠え出したのか——それもおかしいが、力なく首垂れていた。

薄暗い悲壮な気持にとざされて、胸がしきりに痛んだ。

広い通りに出て、そこのレストーランにはいった。

「定食。……それから、日本酒を一本くれ給い。」

うっとりと思いつめた気持のために、装わずして大人（おとな）の態度になっていた。

片隅に三人の客があった。そちらに背を向けて、白い壁と睥めっこをした。花瓶の半開きの桃の花が、淋しげに淡々としていた。

ゆっくり酒を飲むつもりだったが、料理の皿が次から次へ早く廻されてきた。

気の利かないボーイだな。……何とか云ってやろうと思ったが、変に顔を見られる気がして云い出せなかった。それでも、料理はうまかった。チップを奮発してやった。

一人で……あの家に行って、名差しをすれば、彼女は来てくれる筈だった。……そこへ、大きな地震でも来て、がらがらっとなって、二人だけ生き残って逃げ出す……。

馬鹿な……。だが、何もかもひっくり返ってしまえ、濛々となってしまえ。

日の光が恐れられた。……暗く、天地晦冥になってしまえ。

胸が切なくしめつけられて、きりきり痛んだ。二重眼瞼の眼がちらちらして、目近に微笑んでいた。

電車や自動車や自転車が、素張らしい勢で走っていたけれど、みな、宙を飛ぶようにふわふわしていた。着飾った女共が、どいつもこいつも醜かった。通り過ぎる男共は、馬鹿げた顔をしていた。……だがそんな奴、俺は天下に一人も用はないんだ。

痛む胸に彼女の眼付を秘めて、一心に想い耽って、当もなく歩き続けた。

犬の仔が幾匹も面白そうにふざけていた。

決心をきめて、眼を据えながら家に帰ってきた。母の出よう一つでは、こちらにも覚悟がある、と思っていた。

ところが……口元に笑みを浮べて、やさしい眼付で迎えられた。

「気分はどうなんです。」

「何でもありません。」

不機嫌にぶっきら棒に答えたつもりだったが……。

「どうしたんです。面白そうに……にこにこした顔をして……。」

びっくりして、きょとんと首を傾げてみた。

「何か嬉しいことでもあるんですか。」

張りつめていた気が弛んで、その拍子に、ふいに、飛び上りたいほど嬉しくなった。

「愉快なことがあるんですよ、お母さん。」

とんとんと歩き廻ってやった。それが自分でも変で、ゆっくり考えなければいけないと思いながら、何にも考えられなかった。計画してたことだけがすらすらと口から出た。

「めっけ物をしたんです。素敵な書物があるんです、古本屋に。……二十円下さい、すぐに……。」

「二十円ですって……。」

「ええ、それは大変安くなってるんです。早く買わないと、他にも買手がついてるんです。是非いる本なんです。」

「そんなに急いだって……。」

「いえ、急ぐんです。……買いたいなあ。」

堪らないような風をして、室の中をとんとんと歩き廻ってやった。

「そんなにほしいものなら、お父さんに話してあげましょう。」

「え、お父さんに……。」

しまった……。父の存在をすっかり無視していたが、丁度父が家にいる日だった。……だが……まあいいや。

やけ糞に落付いてきて、火鉢の側に屈み込んだ。ぼんやりして、淋しかった。

そこへ、父がわざわざ書斎から出て来た。

困った、困った……という気で縮こまっていると、父は仕事疲れらしい伸びをしてから、煙草を吸い初めた。

「欲しい書物があるそうだが、どんな書物だい。」

びくりとしたが、神妙そうに云ってやった。

「英語の本です。中世紀の風俗を調べたもので、素敵な挿絵が沢山はいっています。ロンドンで出たんですが、絶版になってるから、注文してもないんですって。それが古本屋に出てるんです。」

「うむ……。」

父は煙草の煙と息とを一緒に含み込んだ。そして咽せ返りもしないで、悠暢に落付いていた。

「それは面白そうだね。……じゃあ買ってくるがいい。買ってきたらすぐに見せてごらん。」

「ええ。」

母は立上って金を出してきてくれた。

新らしい十円札二枚だった。受取ってから冷りとした。それをてれ隠しに、両手で紙幣を引張って、ぱんぱんとやって見た。いい音だった。

「何をしているんですよ。破けるじゃありませんか。」

「ははは。」と父は人の善い少し馬鹿げた笑い方をした。「実際紙幣の紙は玩具にでもしてみたいくらいいい紙だよ。いくら他で真似ようとしても、決して出来ないんだそうだ。」

云いながら、少し禿げかかった額でのっそり立上った。そして近眼鏡の奥に眼を一つぎろりとさして、それから向うへ出て行った。

何だか身が縮こまってきた。……父は感づいているのじゃないかしら。うっかりは出来ないぞ。いつまでもじっとして、黙りこくっていた。

「早く行ってきたらいいでしょう。……あ、そうそう、御飯を食べてからにしますか。」

「ええ。」

洋食を食べてから余りたたない腹へ、無理に茶漬を一二杯つめこんだ。

母も一緒に、干物の匂いを立てながら、つつましく食事をし初めた。牛乳だけを飲んだ父は、散歩代りに庭を歩いていた。

「こんど井上さんがいらしたら、昨日の御礼に御馳走をしてあげなければいけませんよ。」

そんなことを云いかける母の側から、ぷいと箸を捨てて立ち上った。が、さて、変に身の置きどころがなかった。

縁側に立ってると、庭の植込の影に父の姿が見えた。

「お父さん、外に何か用はありませんか。」

一寸機嫌をとるつもりで云ったんだが、父は別に怒ってる風も……疑ってる風もなかった。

「上野はどうだい。……もう咲いたかな。」

庭の隅から伸び拡がってる、低い桜の枝の下を、父は浅黒い顔で

歩いていた。

「まだでしょう。」

「そうかな……。兎に角この……桜の咲きかける時分が一番眠いものだが、お前も休みだからって朝寝をしないで、しっかり勉強しなくちゃいけないよ。」

だが……調子も穏かだし、こちらを向いてもいなかった。

あまいものだ……。親馬鹿……子馬鹿……。

ぴょんと飛びはねて、母のところへ戻ってきた。母はまだ飯を食っていた。

「行ってきますよ。」

云い捨てて表へ飛び出した。

後顧の憂いなし。……書物は売れちゃったと云えばいい。

明るく静かだった。何もかも晴れ晴れとしていた。けれど……不思議に気持がぼやけてしまった。何もはっきり浮んでこなかった。

前日から、長い長い時間がたったようだった。

「嘘、嘘、初めてじゃない。」とあの女は云ったっけ。

なるほど、初めてじゃない……かも知れない、と思うほどつまらなかった。

くそ、面白くもない。

二重眼瞼のちらちらした眼付が、何処を探しても見つからなかった。余り晴れ晴れとしていた。

それでもやっぱり……事実は事実だ。

往来の石ころを、下駄の先で蹴飛して歩いた。ころころとよく転った。

そんなもんだ。そんなものだ、童貞なんて。大切でも何でもない

ただ円い玉、どこへ転ってゆこうと平気だ。溝（どぶ）の中へでも、青空へでも、勝手に転ってゆけ……。

こつん……こつん……と、下駄の先に当る石ころの音が気持よかった。

昨日俺を連れ出した井上のとこへ行って、どんなもんだい……とこっちから云ってやったら……。或は父と母との前に何もかもぶちまけて……。第一父母なんてものが可笑しかった。

懐手の先で探ってみると、すべすべした紙幣がたしかにはいっていた。……大事に使わなくっちゃ。

あなたが好きになったって……馬鹿にしてやがる。

然し……どうしていいか分らなかった。余りに晴れ晴れとした暢（のびや）かさだった。どこかへ……まん円いものが転っていって見えなくなっていた。涙が出そうなほどすがすがしい胸心地だった。

どうしたら……畜生……。しきりに石ころを蹴飛してやった。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集　第二巻（小説2［#「2」はローマ数字、1-13-22］）」未来社
　　1965（昭和40）年12月15日第1刷発行
初出：「中央公論」
　　1925（大正14）年4月
入力：tatsuki
校正：門田裕志、小林繁雄
2007年11月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

童貞

豊島与志雄

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/